

洋書輸入協会会報

VOL. 17

NO. 6

(通巻194号) 昭和58年 6 月

理事会報告

4月26日(火)

(一) 東西合同懇親旅行

4月22日(金)に開催された文化厚生委員会の提案により6月10日(金)、11日(土)の両日岐阜市長良川畔で行われることとなった。

(二) 脱会

株式会社信山社の脱会が承認された。

(三) 総会

5月11日(水)開催される予定の総会の運営について打ち合わせた。

(四) コピー問題

複写機の普及に伴う影響について調査し、対策をたてるため、新しい委員会を組織することとなった。

(五) 田保橋彬氏の講演

3月22日(火)に学士会館で開催された同氏の講演の内容を、同氏の校閲を経て、会報に掲載することが報告され、了承された。

(六) Gordon and Breach 社

同社の Mr. Martin Gordon からの洋書輸入協会あての手紙のコピーを会員へ送ること、ならびに合意事項に関する同氏からの手紙にサインをすることとした。

(七) その他。

5月11日(水)

(一) 総会

本日開催される総会の運営について協議した。

(二) 洋書専従従業員数調査

かねて企画渉外委員会で調査中であった従業員数の調査が終わり、その結果が報告され、総会で発表することとなった。

(三) その他。

定時総会報告

昭和58年度定時総会は、5月11日(水)午後2時から学士会館(本郷)にて開催された。

司会者、栗原氏(洋販)の開会のことばののち柴田事務局長から、正会員97社のうち出席45社、委任状提出36社、合計81社で総会が成立したとの報告があった。(その後の出席6社)賛助会員の出席は10社であった。

ついで司会者から昭和57年度入会の新会員、株式会社洛陽書店、株式会社西村書店、株式会社名著普及会が紹介され、また昭和57年度中に賛助会員および準会員から正会員になられた各社、OECD 東京広報センター、株式会社アカデミック・プレス・ジャパン、エルゼビア・サイエンス・パブリッシャーズ東京支社、株式会社エルピス、株式会社神田教文館、株式会社考古堂書店が紹介された。

ついで恒例の自己紹介ののち、理事長代理、福田忠氏

理事会報告.....	1	海外ニュース.....	3	お知らせ.....	9
定時総会報告.....	1	学術情報システム.....	4	書籍展示会のおしらせ.....	9
文化厚生委員会		外国出版社紹介 No.94	7	来日外人名簿.....	9
釣だより.....	3	Book Review No.92	8	総代理店ご案内.....	9
関西支部ゴルフだより.....	3			広 告.....	10

(丸善) から大要次のような挨拶があった。

「この一年を振り返ってみると、世界経済は、不況、国際金融不安、貿易摩擦等がつづき、また我々輸入業者にとって最大のポイントである外国為替相場も、昨年の10月まで長期にわたる円安傾向の継続があって、一時は280円をオーバーするのではないかと危惧された。各社の収益に及ぼした影響は少なからぬものであったと思う。12月以降円高基調となり今日に至っているが、例年になく波乱に富んだ極めて厳しい年であった。会員各位におかれども、いろいろと苦労されたことであろう。

世界経済の要となっている米国経済も、漸く回復の兆を見せて来たとの見方もあるが、現下の世界経済の実態はなかなか安易なものではない。一方国内的には、昨年度の国家予算は、予算編成史上初のゼロシーリングを採用し、更に本年度は実質マイナスシーリングの予算の中で、文教予算への影響も大きく、洋書の需要は一向に増加せず低迷している。

この様な厳しい環境の中ではあるが、各社それぞれが企業責任を十分に自覚して健全な経営を図り、海外取引先への信用を失墜しない様真剣に努力して行かねばならない。また、海外小売業者のわが国市場への進出が活発化する中で、各社は顧客へのサービスの向上をもって、これに対処することが肝要と考える。

会員各社の繁栄と、協会の発展に向って、共に頑張っていくことを念願する。」

福田理事長代理はついで理事会報告にうつり、昨年度は海外小売業者のわが国市場への進出問題等に、各委員会と協力してとりくんだ。また、英国の出版事情や、わが国洋書マーケットの状況などにつき British Council と懇談し有意義であったことを報告、詳細は「会報」の理事会報告、および次に行なわれる各委員会の報告にゆ

ずった。

ついで各委員会報告にうつり、総務(丸善・大脇氏)、会報(紀伊國屋書店・相良氏)、企画渉外(U.S.Asiaic・山川氏)、ダイレクトリー(東光堂書店・石内氏)、洋書交換(国際書房・服部氏)、雑誌(日本出版貿易・岸氏)、文教(紀伊國屋書店・吉本氏)、通関(洋販・栗原氏)、文化厚生(三洋出版貿易・武田氏)各委員長から、それぞれの一年間の活動と今後の課題についての報告があった。

ついで昭和57年度決算報告が大脇氏によりなされ、佐野氏(南江堂)、山縣氏(内外交易)の監査報告ののち、拍手で可決、承認された。

ついで大脇氏から昭和58年度予算案が提案され、拍手で可決、承認された。

ついで丹羽氏(緑書房)により、関西支部報告、昭和57年度決算報告および昭和58年度予算案提案がなされ、いずれも拍手で可決、承認された。

以上の議事が終了したのち、相良氏が閉会の挨拶にたち、

「洋書輸入協会会報3月号に、昭和57年1～12月の洋書輸入通関統計の記事を掲載したが、これによると昭和57年は56年に比較すると大幅にアップしている。しかし昭和56年が55年に比較して大幅にダウンしていたので、昭和57年度は或る程度回復したというものの、まだ55年の水準には達していない有様である。このように業界の環境は依然として厳しいが、得意先、仕入先および各社の立場をよく勘案して、共に業界繁栄のため努力して行きたい」旨を述べ、総会をとじた。

4時30分から恒例の懇親パーティにうつり、東光堂書店石内氏の音頭による乾杯で宴を開き、歓談のひとつきをすごした。



釣りだより

5月21日午前8時、江ノ島片瀬港を出船、今回は参加18名と今までの最高的人数、船も36人乗りと大型化し、比較的ゆっくりとそれぞれの釣場を確保することが出来ました。好天にめぐまれ、海もおだやかで、絶好の釣り日より鎌倉沖から辻堂方面へと数度釣場を変え、おめあてのシロギスと賞品をねらってそれぞれ自慢の竿を振った結果、

優勝 テクニコン 楯氏 18尾
二位 南江堂 藤田氏 13尾
三位 " " 若松氏 13尾

となりました。楯氏は参加のつど優勝賞品を持っていく釣天狗、次回からはゴルフの様にハンディをつけねばと賞品購入係の幹事は考えております。シロギスの釣果はいまひとつでしたが、メゴチやカワハギまじりの外道が結構釣れ、それぞれ家へのお土産が出来ました。秋にはアジ・サバを予定しております。(MT)

4 " 畑 雅弘(厚生社) 80 (30)
5 " 松永泰吉(北尾書籍) 83 (5)
DC 荒川正巳、正木憲悟(緑書房)
NP 畑 雅弘、松永泰吉

この結果、取切戦も中村光伸氏に決り、両手に花の同氏の優勝でした。

第12回 (S. 58/5/21 於瀬田 G.C. 参加11名)

優勝 森田紀雄(旭屋書店) 65 (25)
2位 三宅璋弘(三晃図書) 77 (36)
3 " 松永泰吉(北尾書籍) 78 (4) (年令順)
4 " 前田敏雄(ブックマン) 78 (15) "
5 " 谷口定三(厚生社) 78 (25) "
DC 松永泰吉、中村光伸(ブックマン)
NP 森 吉彦(洛陽書店) 加藤一夫(厚生社)

(関西支部・HM)

海外ニュース

関西支部ゴルフだより

第10回関西支部長杯争奪ゴルフコンペ

(S. 57/11/20 於三田レークサイド C.C. 参加12名)

Net (HDCP)

優勝 森 吉彦(洛陽書店) 74 (25)
2位 野村昭夫(旭屋書店) 72 (25) (初参加)
3 " 前田敏雄(ブックマン) 82 (17)
4 " 谷口定三(厚生社) 85 (25)
5 " 畑 雅弘(") 85 (30)

ドラコン 谷口定三、前田敏雄

ニアピン 森 吉彦、渦原輝行(至成堂)

第11回 (S. 58/3/19 於瀬田 G.C. 参加16名)

今回は、紀伊國屋書店藤本勉氏の初参加、東京の鶴三郎氏(東亜ブック)の特別参加、JBIA 第1回東西対抗以来無欠席参加の渦原輝行氏(至成堂)が当業界を去られる送別の意味もこめて、さらに第1回より第10回までの優勝者6名による取切戦もかねて、賑々しく行われました。

優勝 中村光伸(ブックマン) 73 (28) (年令順)
2位 荒川正巳(ユニオン) 73 (3) "
3 " 渦原輝行(至成堂) 77 (15)

「英国書籍業界の総売上」

1982年の英国書籍業界の総売上は、約11億ポンドで、前年比2.1%増に留まった。この内、輸出の占める割合は30.6%で、1981年の売上に対し600万ポンドの減少となった。しかし、昨年前半低迷を続けた英国出版界も、秋口からようやく回復に向かい、特にクリスマス・セールが活況を呈したこと、及び今年は好調な滑り出しを見せていることから、徐々に明るさを取り戻してきていると言えよう。

一方、収益面では大幅な改善が見られ、過去最高の利益を計上した出版社も少なくない模様である。これは、売上増というよりむしろ経営の効率化によるところが大きかったようだ。

なお、発表された数字は、Dept. of Tradeの集計に基づくもので、海外子会社による出版販売額を正確に把握することが難しいため、輸出分については実態より幾分低く推計されている。実際の書籍輸出額は、4億ポンドに近かったものと思われる。

(The Bookseller, 5月7日号より)

—紀伊國屋書店提供—

これからの学術情報流通の在り方 II

(講演 昭和58年 3月22日(火) 於：学士会館)

日本学術振興会総務部長 田 保 橋 彬

(前 文部省 学術国際局情報図書館課長)

学術情報システムの背景

学術情報システムについては、お手元に差し上げてあるパンフレットに従ってご説明いたします。文部大臣の諮問機関である学術審議会が、約10年位の頻度で学術行政の在り方、学術研究の基本方策を策定しており、昭和48年にこの答申が出ております。その中で学術情報に関する問題点が指摘され、又将来の方向が示されている訳ですが、大学図書館に於ける機能の充実であるとか、図書の利用であるとか、人材養成であるとか、基本的な指摘に留まっております。その後私共はその主旨に沿いまして、科学研究費を数年間に20億円程度交付し、7つの大学に設けられている大型計算機センターを中心にし、それらに研究者を結集して広域的な、又大量の情報処理の研究を行ないました。これらの研究の成果をふまえて、文部大臣は昭和53年に学術審議会に「今後における学術情報システムの在り方」を諮問しました。審議会は昭和54年6月に中間報告をまとめ、各大学のご意見を頂いて昭和55年1月には「今後における学術情報システムの在り方」の答申が出されました。

「今後における学術情報システムの在り方」の内容

その内容は、まず第一に2次学術情報の流通システムを完全に整備するという事です。現在世界的に年間700万件程の情報量が生産されているといわれており、人によりましてはその倍以上だという話もあり、年間の増加率は10年間で2倍になるともいわれています。これら、大量に発生する研究成果の情報を、どのようにして的確にかつ迅速に研究者が入手するかという事が今後における我が国の先端的、又は独創的な研究の展開に不可欠な要件であり、その為のシステムを整備すべきであるといわれています。学術情報の中には抄録等の文献情報は勿論のこと、数値、画像の情報までも入れた形での学術情報の流通システムということです。

二番目としては、この学術情報のシステムを利用したオンライン検索等を行って、最終的には研究者は必要と

する原論文に到達しなければならない、ということがあります。このため我が国の大学等に所蔵しております図書、雑誌の所在目録のデータベース化を図るべきであり、目録、所在情報のネットワークを作ることが不可欠となってきます。これについては既存の米国議会図書館が作成している MARC という電算可読の目録の利用、また我が国立国会図書館が作っていますジャパンマークの利用、更にはその中間段階を埋める所の出版関係で作りになっている情報システムの利用等々を含めて、所在情報のネットワークを作ることが必要であります。それによって2次情報で得た情報をもとに所在情報データベースを利用して、どこに何があるかを知り、必要によりネットワークを利用して所蔵館にリクエストを行い、その後ファクシミリ、郵送等によって原論文を利用者の手元に届けるシステムを考えています。

三番目としては、学術情報のデータベース化のことであります。最近各国で学術研究成果等の情報がデータベース化されており、公共的に利用し得るデータベースは約400件といわれています。若干科学技術以外のものもありますが、その60%以上がアメリカで作られており、分野によっては80%、90%というものもあります。そうしますとその分野の学術情報、もしくは科学技術情報が或る一カ国に握られてしまつて、所謂「情断」という現象が国際関係で起こった場合には、完全にギブアップしてしまう恐れがあります。

また、我が国の研究成果は、自然科学、科学技術分野では、全世界の情報量の10%を日本で生産しているにもかかわらず、国際的なデータベースへのインプットが非常に少ないといわれています。学術情報についても、また科学技術情報についても国際的にギブ アンド テイクという様なルールがありますので、国内における大学等の研究成果をいち早くデータベース化し、それを自ら運用すると同時に国際的に普及を図る。更には国際的なデータベースにインプットし、それに対する権利を確保

する様な事が必要ではないでしょうか。国内的な研究成果を国際的に普及するという問題であります。

四番目の問題としては、今申し上げた問題とは別にどの研究者がどのような研究をしているか、どこに所属しているか、という様な所謂クリヤリング的なデータベースの作成という問題もあります。これらを含めて学術情報システムと言っている訳ですが、これを早急に発足させるべきであり、その中心機関としては学術情報センターを設置すべきである、というのが55年度の学術審議会の答申である訳です。

「学術情報システム」の調査研究と具体化方策

私共はその答申を実現するために文部省内に、昭和55年の5月に学術センターシステムの開発調査協力者会議を設けて、東京大学工学部の猪瀬博教授を座長にし、若手の情報処理、社会システム、システム工学の研究者、それから若干の図書館関係者を入れまして技術的な検討を重ねている訳です。これとは別に昭和56年には学長クラスにより設置のあり方、施設のあり方を検討する学術情報センター設置調査会議を設けました。京都大学の元学長であって、現在の科学技術会議の常勤委員である岡本道雄先生を座長にしてご検討頂いております。昭和58年度以降には、学術情報センターを発足させたいと思っていましたので、創設準備の要求をした訳ですが、ご承知の様に現在の行財政の事情の下では新規施設の設置は難しいので、当面実質的な学術情報システムを段階的に作り上げる方策を考えております。現実問題として先程申し上げました答申の第1のシステムである二次学術情報システムについては、すでに7つの大型計算機センターが、電々公社の新しい通信回線網 DDX により結ばれていますので、1つの大型計算機センター群として働いており、その端末としては国公立大学2,900の端末を持っております。その端末ネットワークを利用して二次学術情報システムは試行的に活動しています。現段階では約40の外国より導入したデータベース並びに36の国内のデータベースを運用しており、研究者からのオンライン検索に応じております。例えば最も利用度の高いケミカルアブストラクト サービスについては、東京大学の大型計算機センターが運用しており、2,900の端末からアクセスできます。利用料金の問題もあろうかと思いますが、大体月3,000件程度のアクセスがあります。試行段階ですのでユーザーが約700、3,000件程度のアクセスと少ないのですが、今後は利用が広がって行くと思われま

す。

一方、第2のシステムと申し上げた目録所在情報のシステムは、図書館システムと言っても過言ではないだろうと思います。現在、各国立大学の図書館に中型計算機もしくは端末計算機を逐次導入していますが、核になる様なセンターを持っていませんので、東京大学に58年度から「文献情報センター」を設け大型計算機を入れて、技術開発並びに試行を開始しようとしている訳です。これは現在東京大学にあります情報図書館学センターを改組して新しい組織にする訳ですが、将来私共が考えている学術情報センターに設置されるであろう計算機のほぼ10分の1位の規模の計算機を入れる事にしております。したがって当面、将来の学術情報センターの機能を大型計算機センター群と文献情報センターとで果たし、将来的には国立大学の共同利用機関として集約させる構想であります。その場合に大型計算機センターについては一部ローカリティのあるデータベース情報サービスを行なうと同時に、本来の業務である計算業務が行なわれるので、全部の機能を集約する訳ではありませんが、今申し上げた2次学術情報システムと目録所在情報のシステムの2つは、学術情報センターの中に吸収したいと考えています。

更に三番目の機能という形で先程申し上げた、国内の研究情報を国外に出すという問題については、国立学校の経費の中でデータベースの作成経費等を、新に事項を立てて58年度以降に推進したいと考えています。これについては昭和56年から科学研究費の補助金の中でデータベースの作成を行い、既に13本のデータベースが作成されていますし、国立大学の事業の中でも20本近くデータベースが作成されております。これらを統合しつつ、なるべく早く先程申し上げたシステムにのせたいと考えています。又国内のがん情報、化学文献のデータベース等については、それぞれの国際的なデータベースにこれをインプットしたいと考えています。情報問題についてはバーゲニング パワーを持ちませんと世界的に優位性を確保し得ない、といえるかと思えます。すなわち学術情報を入手するためには、ギブ アンド テイクの原則が働きますので、先程申し上げた様に、国内の研究成果のデータベース作りについては、特に力を入れなければならないと考えている次第です。

現状と問題点

この学術情報システム計画の実現について問題がいく

つか挙げられます。

- (1) 爆発的な学術情報の増大に対処するにはどうすれば良いか、どういう手段があるかという問題です。ケミカルアブストラクトに収録されている文献数の変遷をみますと、急速に伸びて来ています。現段階でもデータベース化されている化合物は560万件ありますし、年間30万件以上の化合物が増えています。
- (2) 従来の蛸壺方式の研究者にとりましては、情報なんていうのはいらないという事なのかも知れません。自然科学系の雑誌を多く購入する先生方にはそういう事はありませんが、洋書の単行本を沢山お買いになる人文社会学系の先生には、ややもすれば蛸壺式研究方式をお取りになっている先生方も少なくありません。先程申し上げた様に経費の伸びが悪くなってくると、その先生方の中には文部省は金を切ってくる、研究を阻害しているのではないかと受け取られている方もいらっしゃる。しかし、私共と致しましてはそれはやはり国民の財産でありますので、共同利用という方向へお進み頂ければ、と考えている訳です。それはさておいても、情報流通の必要性は、自然科学系はもとより人文社会学系においても、自然科学的な研究方法を取ります分野では最近非常に問題になっていることは、情報を一体いかに迅速に入手するかということです。
- (3) 我が国においては情報入手の立遅れというのは非常に大きくて、基本的には何が原因だろうかと色々先生方にお伺いした事があります。元来、情報という見えない物に金を払う気にはなれない、智慧は貸してくださいという形で借りるものとお考えになっており、現実問題として情報に対してお金を払うという意欲は仲々起こらない。これは又減るものではないから貸せという話になって来る訳です。したがって情報の流通体制については根本的に考え方が違うのではないか、という問題があります。
- (4) それから、従来国外からはいつて来た知識を独占する、人に知られないで自分で独占している方が研究者としてのポジションを維持出来るのではないか、これを公開してしまうと地位が総体的に下落してしまうから、とにかく買ったらしっかり鍵を掛けて人に見せない、というような事があるのではないかということがあります。このように情報の流通体制は諸外国に比して非常に立ち遅れており、これは政府自体に対する非難でもある訳です。アメリカでは連邦政府がデータベー

ス等の作成について巨大な投資をしており或る程度蓄積されると政府投資を基にした民間主導型のサービスとなっている。ヨーロッパでは情報に起因するアメリカの攻勢に対して、政府主導型で立ち向かっている訳で、データベースを作るのも国の予算ですし、又その運用についても国自体、もしくは特殊法人あるいは共同体という形で行われております。このような事態の中で大型計算センター間のネットワークによる試行的学術情報サービスを利用する研究者が増加し、情報流通システムの整備に研究者自身が非常に意欲的になってきており、新しい研究を推進して行くための情報の入手の必要性和相まって、現段階における各大学の個別の情報システムの展開が強く望まれています。

- (5) 学術的な一次情報の蓄積の問題ですが、我が国においてはその大部分は大学図書館が蓄積しています。国会図書館を含めた図書館の蔵書総冊数は、1億7,000万冊から1億8,000万冊あり、その中の1億冊程度は大学が所蔵しております。また学術雑誌についても大よそ12万5千タイトルが大学に所蔵されております。しかしながらそれぞれの学内の必要に応じて購入され、蓄積されている訳で、全国的な見地からこれが調整されている訳ではありません。したがって重複が多いとか、必要であるが欠けているものがあるとか、所謂網羅性に欠けている訳です。今後も現在もそうですが、二次情報の流通、普及によって原論文にアクセスしなければいけない機会は格段に増えてくる訳で、自大学で所蔵していない雑誌等についてどうするか、という問題が大きくなって参ります。したがって一次情報を全国的な見地から網羅的にどの様に収集するか、という問題が出てきます。
- (6) 国際的協力の必要性というのは、ギブ アンド テイクの問題を含めて、国際的な情報流通が欠けると、我が国の学術研究の進展に阻害要因となるという事です。

学術情報システムのサービス

これらの現状の中で学術情報システムは何をねらい、どのような機能をするかという事です。第1番目には一次情報の体系的・網羅的収集を促進するという事です。それは、文献、数値、画像を含めて一体どの様に一次情報を収集して行くかという事で、その例として理工学・医学生物・農学と3つの分野について学術雑誌センターを置いて、そこに外国雑誌を集中するという事です。こ

れについてはそれぞれ研究者が頻繁にご利用になる、所謂コアの雑誌については各大学でご購入頂く、しかしその周辺部の、あまり利用しないけれども我が国としては是非なければならないという雑誌については、センターに集中し、コピーサービスを行なうということです。これらのセンターで約9,000タイトル、金額にして、2億数千万円の外国雑誌を購入し、施設等についても増築をし、又このための人員も現下の行政改革のもとですが、新たに措置をしております。これは正に共同利用という形の典型的なスタイルではなからうかと思えます。このセンターの充実に伴ない、従来から行なっていた英国図書館(BLL)に対する複写の要求が半減したとのことで、今後これらの外国雑誌センターの充実によって海外複写並びに各大学における雑誌購入の直接的な負担を軽減しつつ、網羅的な収集にもって行きたいと考えております。これらのセンターにおける雑誌の購入については、綿密な各大学のご希望、ないしはブロック内のご希望等を勘案して、センター間の協議会で調整をしております。それから又、人文社会学系については、53年から大型コレクションについて措置をしており、これも多くの大学のご利用を頂く様に、共同利用という事を前提にしております。人文社会学系のコレクションについては、例えば、

判例集の様なものは全国1カ所が良いのか、2カ所必要なのか、或いはブロックごとに置くべきではないか、ということです。いずれにしても利用度、質、大学の研究者の所在等によって措置をしている状況です。

それから2番目の、二次情報データベースによる情報検索システムを再編成し充実することは、現在各大学大型計算機センターが個別に行なっていますが、このようなサービスを一元化して、どこからでもアクセス出来る様に再編をし直す事が1つの問題です。それから3番目は、大学図書館等において受入れた図書・雑誌について自動的にデータベースを作成する、という仕事があります。これは所在情報目録ですが、LCマーク、ジャパンマーク、ジャーマンマーク、ブリテッシュマーク等色々ありますが、それらのマークを学術情報センターに備えれば、目録は既にインプットされているので、各大学図書館は端末からそこへ自館の所蔵記号をインプットすればよく、カード等のハードコピーもすぐに出せる。またマークに入っていないものについては、オリジナルデータをインプットをするというシステムを整備して行くことが必要となります。

(つづく)

外国出版社紹介 No.94

Stainer & Bell, London

Stainer & Bell社は英国の音楽を広めるために英国の作曲家達が集まって1907年に設立したもので、最初に手がけたのがスタンフォードの後期の作品等、ホルストの“Hymn of Jesus”、ヴォーン・ウィリアムズの“A Sea Symphony”でした。

1917年にはカーネギ財団との間に同財団が所有する英国作曲家の作品の出版契約を結んでE. H. フェロウズの編集で“ウィリアム・バード全集”“English Madrigal School”“English School of Lutenist Song Writer”などの叢書を出版、1953年には編集顧問にT. グート氏を迎えこれらの叢書類の改訂版を出版しました。これらは今日に致るまで世界中に広く使用されて

います。

1951年にはRoyal Musical Associationの委嘱を受けて“Musica Britanica”、1963年からはEarly English Church Music等のシリーズ物、教会関係の合唱、オルガン曲をはじめとし古い時代の作品、英国の現代音楽家の作品を多方面にわたって出版しています。

尚、1971年にはガリアード社、1972年にはアウゲナー社等を吸収し業務を拡大し、英国の楽譜出版界では学術的出版社として定評を得ています。社長はBernard Arthur Braley氏が1968年に就任、1978年にはEditorial DirectorとしてAllen Percival氏が参加しました。(Y.H.)

武内 博 編著 来日西洋人名事典

1983年 日外アソシエーツ(株) ¥12,000

このたぐいの事典は外にもあるだろう。例えば「岩波西洋人名辞典」(本会報 昭和57年3月号にて紹介)も代表的なものの一つだ。にもかかわらず本書をあえて世に問う意義は何だったのか。編著者 武内 博氏は、文部省図書館職員養成所卒、名古屋大学法文学部図書室勤務から、現在は東京学芸大学附属図書館に勤務の生粋の図書館人及び Bibliographer と云うべき人である。我が国の近代化に主として幕末から明治初期にかけて来日した、先進諸国の西洋人が大きく貢献している事は、無視する事が出来ない事実であるが、氏は多年にわたって全国的な規模で、来日西洋人の墓碑などの実地調査を積み重ねてきた。それらの実績を挺子にして多くの埋もれた人物を発掘してきたという。刊行の辞に「従来比較的軽視されてきた“お雇い外国人”以外の宣教師、外交官、貿易業者、技術者など埋もれた人物を発掘出来たことであり、そして、これらの人々が、近代国家への道を急いだあまり、わが国が顧みなかった女子教育、福祉事業などの分野で、慣れない異国の風土・習慣に耐えながら、いかに献身的な貢献をなしたかを明らかにすることが出来たことである」とあるように、ユニークな実績をもとに本書を編纂したとのべている。その第一の留意点として、文献的な調査・研究に重点をおいたとという。戦前、戦後を通じての、我が国のこの分野での先駆者の業績は勿論の事、国立国会図書館や国立公文書館所蔵の伝記資料、ならびに欧文関係の人名辞典・人名録 (Dictionary of National Biography, Who was Who をはじめ、カトリック大辞典、岩波西洋人名辞典等枚挙にいとまがない) も含め可能な限り現物を渉猟したという。そしてそれらを「文献として本文に収録する」ことにより、関心を持った人が一層研究をすすめられるように配慮している。したがって略歴が判明していても文献の裏付けのない人物は採録を見合わせたという。このような方針のもと、収録された人物は全部で1,133人にのぼっている。

では本書を順序に従ってひもどいてみよう。まず扉

の次に、クラーク博士 (1826—1886) の北大構内にある記念碑が、一ページ大にのせてあり、外に全国の記念碑・墓碑の写真が6ページにわたって並ぶ。これらの写真はいよいよそれらの人物についての興味をおこさせる。そして凡例 (付主要参考資料一覧) の次には、アイウエオ順の人名目次、そして本文となる。これも日本語に従ってアイウエオ順、アイグルハート (1878—1964) アメリカ人 キリスト教、アダムス (1564—1620) イギリス人 (日本名: 三浦按針) 等略歴と、くわしい文献が続く。読者は必ずやご存知の人名を発見されることであろう。シーボルト (1796—1866) ドイツ人 医学 (長崎オランダ商館医官) を引く。さすがに日本に与えた影響の多大さは、文献紹介は6ページにおよぶ。ハーン (1850—1904) イギリス人 (のち日本に帰化、日本名: 小泉八雲) (雑司ヶ谷霊園にある墓碑の写真が冒頭にのっている) の文献紹介は実に7ページにもおよぶ。モラエス (1854—1929) ポルトガル人 外交 については最近になっても研究が盛んだが、彼は、ブランデーを多量に飲んで縁側から土間に落ちたために亡くなった事実を読むに至って、感無量なものがある。これらの記述は原資料にもとづき、可能な限り事歴的な事項を詳述したが、記述の長短は必ずしもその人物の重要度を示していないと、ことわってあるように記述はたとえ短かい場合でも、文献のくわしさは抜群でさすがに文献の専門家という感を深くする。

付録として 1. 来日年表 これは1544? (天文13年) ピント ポルトガル人 日本文化、1549 (天文18年) ザヴィエル スペイン人 キリスト教 からはじまり 1942 (昭和17年) のモンティニー フランス人教育 までの年代順の一覧表がある。2. 全国墓碑・記念碑所在一覧 これは本書独特のもので北海道から沖縄までおよぶ。索引は 1. 活動分野別索引 分類は布教伝道 (キリスト教)、社会福祉、外交、学術・教育、医療、芸術・美術等 13項目に分かれる。布教伝道関係は348人で、社会福祉の53人をはるかに上回るの

も色々考えさせられる。2. 原綴索引 (アルファベット順) でしめくくる。

はじめ実物を手にした時、体裁の割には価格の方も良いと思ったが、内容に目を通して見て必ずしも高くはないと思うようになった。現代は情報化時代という事だが、これだけの情報を手に入れるためには、金銭に換算したらなどと考えてくると決して高価なもので

はないであろう。折にふれて関心のある個所をパラパラと拾い読みするのも良いが、我々の今までいできてきたそれぞれの人物に対する、生き生きとした、より正確な人物像を再構成する事が可能となるであろう。本書は公共的な機関で備えるのみならず、個人の書架にも備える意義は大きなものがある。

(KBK: KW 記)

お知らせ

株式会社原書店の代表取締役役に次の通り変更がありました。

代表取締役 (新) 原 廣美
(旧) 原 廣

キャリア・マクミラン・インターナショナル (Collier Macmillan International, A Division of Macmillan Publishing, Inc.) の新代表者に、下記のかたが就任されました。

極東代表

寺岡善満 (〒107東京都港区南青山2-4-6
クレセントプラザ一階。電話 (03) 403-4891)

書籍展示会のお知らせ

第16回ソフィア国際書籍展
16th International Book Fair
1984年6月

来日外人名簿

5月上旬 Mr. Jean Lis

F. Nathan Editeurs, Paris

" Mr. R. Machesny, Sales Manager,
Macmillan Pub., Ltd., London

5月上旬 Dr. G. Hennig

Dietz Verlag Berlin (DDR)

5月中旬 Drs. Jan Reijer F. Th. Groesbeek, Editorial
Director, VNU Science Press BV,
Utrecht

" Mr. Ruud Huyzer, Chairman,
VNU Boekengroep BV, Utrecht

5月中旬 Mr. K. Rose, Chief Editor,

Longman Group Ltd., Harlow

" Mr. G. Kurtze, President,
Grossohaus Wegner, Hamburg

" Mr. Albert Hayat, President,
ADCO International Co., Glendale

" Mrs. Laurie Flanagan, Manager of Int'l
Sales, D. C. Heath and Co., Indianapolis

" Mr. T. Hailstone, Marketing Director,
Gower Medical Pub., London

" Mr. Hamilton, Managing Director,
E. Arnold Pub., Maidenhead

総代理店ご案内

(株) 紀伊國屋書店 ☎(03) 354-0131 (代表)

Histoire de l'édition Francaise. (Promodis)

Tome 1: Le Livre Conquérant: des origines de l'
édition à 1660. 1983 ¥32,500

Tome 2: Le Livre Triomphant: de 1660 à 1830
..... 価格未定

Tome 3: Le Livre Concurrencé: de 1830 à nos Jours
..... 価格未定

Bourbaki, N.—Elements de Mathematique.
(Masson) All Vols.

北屋書籍貿易 (株) ☎(06) 203-5961
(03) 573-3031

Jones & Hunt- Veterinary Pathology, 5th ed.
(Lea & Febiger) ¥27,200

INTERNATIONAL ENCYCLOPEDIA OF PSYCHIATRY, PSYCHOLOGY, PSYCHOANALYSIS AND NEUROLOGY

The Progress Volumes

Editor-in-Chief: Benjamin B. Wolmann

Progress Vol. 1.

〈本年5月刊行予定〉 1983.

定価 ¥32,600

精神医学、心理学、精神分析学、神経学をはじめ、生化学、発生学、精神身体医学等関連分野の過去数十年間の調査・研究・実験の集積を、約2,000の見出し項目中に体系化した“現代の古典的名著”「精神・神経・心理学国際百科全書」(1980年刊)に最新成果を追補すべく、第1補遺が刊行されます。本補遺には下記の分野に関する約136の項目が収録されます。

〈収録分野〉

In the area of Psychiatry: Recent developments in Family Therapy, Forensic Psychiatry, Genetics, Geriatrics, Heroin Dependence, Infantile Autism, Infant Psychiatry, Masturbation, N.I. M.H., Organic Mental Disorders, Psychiatry as Practiced Around the World, Psychopharmacology, Schizophrenia, and much, much more.

In the area of Psychology: Recent studies in Bilingualism, Classification of Mental Disorders, Clinical Child Psychology, Clinical Psychology, Computerized Testing, Cross-Cultural Psychology, Experimental Psychology, General Systems, Industrial and Organizational Psychology, Meditation, Mental Retardation, Minority Group Children, Memory, Motor Behavior, Persuasion, Personality, Psychopolitics, Research Methods, Social Programs, Terrorism and a host of other issues.

In the area of Psychoanalysis: Innovations in theory and practice such as Communication in Psychoanalytic Treatment, Conflict Free Sphere of the Ego, Kohut's Self-Psychology, Listening Process, Psychoanalytic Techniques, Psychoanalytic Theory and many other articles.

In the area of Neurology and Neuroscience: Current research in Brain Behavior, Brain Injuries, Brain Mechanisms, Central and Peripheral Nervous System, Endorphins, Gangliosidosis, Ground Substance, Lipidoses, Huntington's Disease, Neuro-Immunopathology, Neuromelanin, Neurometrics and much, much more.

—〈本体／全12巻：既刊〉—

INTERNATIONAL ENCYCLOPEDIA OF PSYCHIATRY, PSYCHOLOGY,
PSYCHOANALYSIS AND NEUROLOGY. Ed. by Benjamin B. Wolmann.

12 Vols. 1977. (Aesculapub., USA)

概価 ¥264,000

(Aesculapub., USA)

日本総代理店



〔〒103〕東京都中央区日本橋 3-9-2 第二丸善ビル ☎(03)272-0331 振替東京7-5番

本店・営業所—東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町)・新潟・水戸・八王子・甲府・横浜・札幌・旭川・仙台・弘前・秋田・盛岡・山形・郡山・筑波・名古屋・静岡・岐阜・三重・金沢・富山・福井・京都・滋賀・大阪・奈良・神戸・姫路・岡山・松山・広島・山口・福岡(店屋町・天神)・長崎・鹿児島・沖縄/ニューヨーク・シンガポール

昭和58年6月

通巻第194号

洋書輸入協会

編集者 柴田 三夫

☎ 103 東京都中央区日本橋 1丁目20番3号 藍沢ビル 603号室 ☎ 271-6901

☎ 530 関西支部 大阪市北区芝田 1-10-2 第一山中ビル ☎ 371-5329